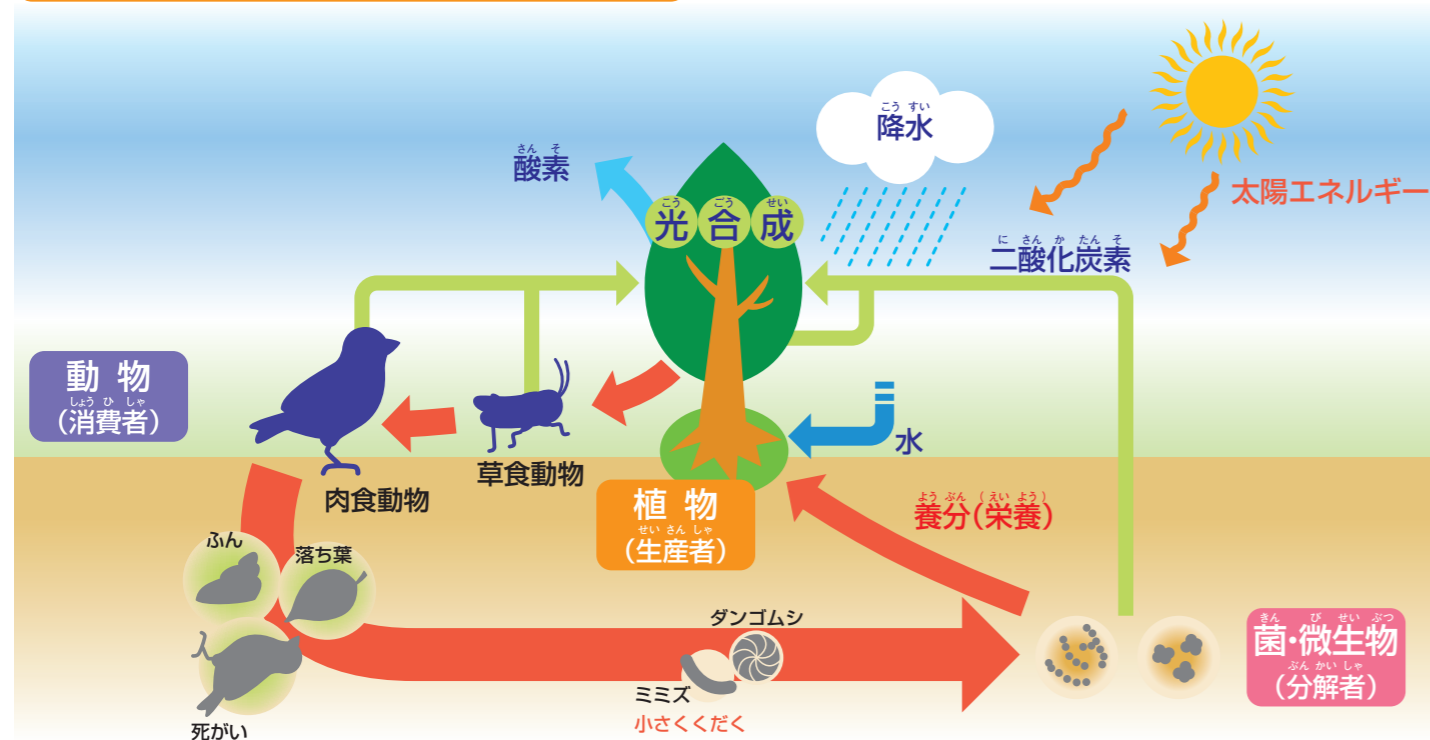


自然のしくみ

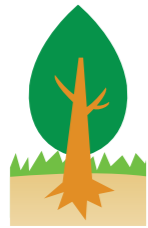
植物や動物など地球上のすべての生き物は、空気や水、土という環境の中でおたがいが深く関わりあい、つながりあって生きています。ここでは、そのしくみについて学びましょう。

生き物のつながり



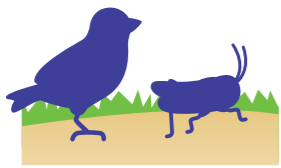
植物の葉や実を、昆虫や小さな動物(草食動物)が食べます。その昆虫や小さな動物は大きな動物(肉食動物)に食べられます。落ち葉や昆虫、動物たちの死がいは、菌や微生物が分解して植物の成長に欠かせない養分(栄養)として土にもどります。このように、食べたり、食べられたりする関係がずっとつながっていることを「食物連鎖」といいます。また、自然の中でたがいにつながりを持ちながら生きていくようすを「生態系」といいます。

植物
(生産者)



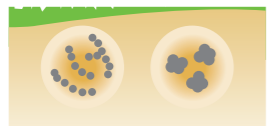
植物は太陽の光をうけて、空気中の二酸化炭素と根からすった水を使って自分で養分(栄養)を作り、酸素をはき出します。このはたらきを「光合成」といいます。自分で養分(栄養)を作りだすことができるという特別な力は植物だけが持っているので、植物は「生産者」といわれています。

動物
(消費者)



動物は自分で養分(栄養)を作ることができないため、植物や動物などの生き物を食べて生きています。そのため、動物は、「消費者」といわれています。

菌・微生物
(分解者)



落ち葉、かたえだ、動物のふん、死がいなどは、ダンゴムシやミミズなどの土の中の生き物が食べ、小さくくだかれます。それが菌や微生物によって分解され、植物の成長に欠かせない養分(栄養)として土にもどされます。そのため、菌や微生物は「分解者」といわれています。

生き物の種類がへっている原因

地球上の生き物は「生産者」「消費者」「分解者」のうち少なくとも1つの役割をもって、たがいに深くつながっています。このつながりのどこかが切れると、生き物の世界のバランスがくずれ、絶滅する生き物がふえる危険があります。

地球上の生き物は全部で約3000万種類といわれますが、わたしたち人間の活動のえいぎょうによって、生き物の絶滅のスピードは自然の速度の約1000倍になっているといわれています。身近なところでも生き物がへっています。たとえば、昔日本にたくさんいたメダカは、近い将来いなくなるかもしれない生き物の中に入っています。

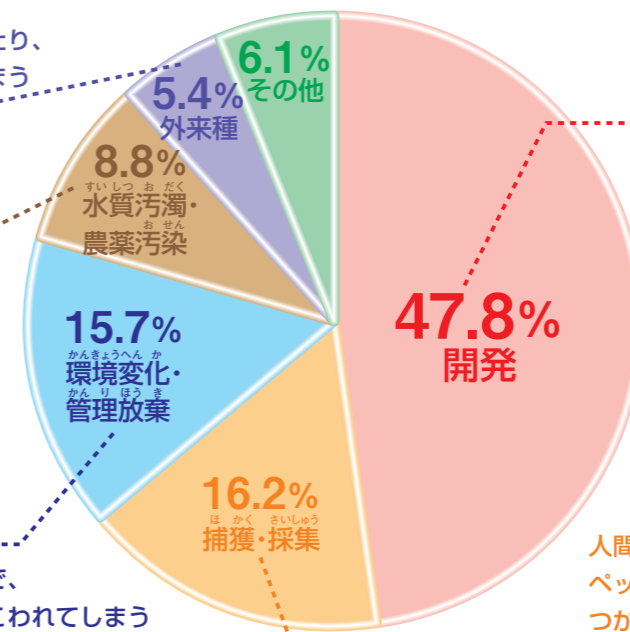
人間が外国や他の地域から持ちこんだ生き物が、もともと住んでいた生き物を食べてしまったり、えさやすみをうばったりしてしまう

農薬や生活排水などで、生き物のすみかをよごしてしまう



木や草の手入れ不足や地球温暖化で、生き物がくらしやすかった環境がこわれてしまう

生き物がへってしまう原因



建築工事や道路や河川の工事により生き物のすみかをへらしてしまう



人間が生きるためや、毛皮やアクセサリー、ペットなど人間の活動のために生き物をつかまえてしまう

※グラフの値は、資料元の値を計算し直し合計を100%にそろえたもの
資料:「我が国の絶滅のおそれのある野生生物の保全に関する点検とりまとめ報告書」

わたしたちにできること

生き物が暮らしやすい環境をこわさないために、わたしたちができることを考えてみましょう。

■身近な自然や生き物のことを調べましょう!

わたしたちのまわりにどのような生き物がいて、どこにすんで、何を食べているか、生き物たちのことをよく知ることが大切です。

■どんな生き物も地球のなかま、大切にしましょう!

- 生き物をむやみに殺さないようにしましょう。
- 山や川、海をはじめ、田や畑なども生き物たちのすみかです。ごみをすてたり、よごしたりしないようにしましょう。
- アメリカザリガニやアカミミガメは昔からすんでいる魚や植物などをどんどん食べてしまいます。つかまえたら池や川にもどさないようにしましょう。
- ペットは必ず最後まで責任を持って世話をしましょう。

